

48年の女性像（6） — Elisa Lemonnier —

加藤 節子

最終回では前回の4人の女性たちのように烈女ではない女性に登場してもらうことにする。エリザ・ルモニエはしかし彼女たちと同様サン＝シモン主義を通過してきたし、また48年には、『女性の声』紙にもその名がみられる。だが彼女の名は第二帝政期になって、初めての女子職業学校を設立したことによって有名になったのだが、それは48年の経験をもとにしてできたものであり、彼女も「48年の女性」のタイトルに価するだろう。

エリザは南仏 Sorèze に 1805 年生まれ、父は Jean Grimalh, 母方は旧家の Barrau de Muratel 家出身、祖母は 93 年にジャコバンによって投獄されたこともある。5 人の子供の内 3 人の兄弟 2 人の姉妹の長女である。父が 1817 年に亡くなって祖母と母に育てられる。女子寄宿学校で読書、文法、算数、地理、歴史、絵画の初歩を教えられる。1813 年の女子教育としては、かなり高度なものであった。更に従姉の Saint-Cyr de Barrau 夫人に 11 才の時引きとられて、教育を受けることになる。初等教育をやり直し、また主婦教育も仕込まれる。

兄たちの通っていた Collège de Sorèze は 1682 年にベネディクト派がつくった学校であるが、プロテスタントの牙城であった Puy-Laurens の有名なアカデミー（Rapin-Thoyras, Pierre Bayle などがここで先生や生徒として在籍したことがあり、ナントの勅令廃止でつぶされた）に対抗するために設立された。1791 年にこの学校は frères Ferlus の所有となり、自由精神によって教育がなされ、すぐれた教師が集められた。肉体と精神の教育と共に美術教育にも力を

入っていた。ここに滞在する外国人や旅人もこの学校の教育方針に協力し、文明の中心のようになっていた。エリザは数年の後、ド・バロー夫人の家から戻って、この Collège のサロンで Ferlus の娘たちと友人となり、またこのサロンに出入りする政治家、哲学者、芸術家、産業人など有名人たちの会話に多くのよい影響を受けていた。

一方彼女の家庭はプロテスタントで、思想の自由と自分の行動の自己責任という教育方針により、彼女の知性と道徳性の発達に大きく役立っていた。1828年 Charles Lemonnier が Collège de Sorèze に哲学の教師として赴任してきて Grimailh 家でエリザと知りあい、三年後には結婚することになる。シャルルはその時 21才、職場で公にカトリックに帰依することが強制されたため、教壇を去ってパリに戻るようになる。しかし、Sorèze でサン＝シモン主義者 Jacques Ressayre と知りあった。レセギエは南仏にサン＝シモン主義布教に大いに活躍した人で、*Producteur* の最初の購読者だった。彼はパリに帰るルモニエに Emile Barrault への紹介状を書く。

§ 南仏のサン＝シモン主義

エミール・バローもまたソレーズ中学の元修辞学の教師であった。パリに帰ったシャルル・ルモニエは rue Taranne でのサン＝シモン主義者の講義を聞きにゆき、法律の勉強をやめて、サン＝シモン主義宗教の使徒になる。

レセギエは *Producteur* 紙終刊のあと、アンファンタンと文通を始めて、一層情熱をもって南仏一帯、モンプリエ、カルカソンヌ、カステルノーダリ、ソレーズ、ロデスにサン＝シモン主義サークルをつくる努力をする。彼は枢機卿会メンバーとなり、南仏教会がソレーズにつくられ、その指導責任者となる。1830年3月にはツールーズで Bouffard と共にプロパガンダを組織し、多くの有能な入門者グループができた。そして1831年1月にはツールーズ教会がつくられ、パリと同じ組織、階級、説教者、労働者教育の機能をもった。第二、第三階級には、砲兵隊長 Hoart, 司令官 Hennocque, 大尉 Jardot, その他農業者、医者、商人、学生などの数々のメンバーを数える。ソレーズでは、レセギエの小グループの数がふえ、そ

の中には、後にサン=シモニズムの最も有名な説教者の一人となる **Emile Barrault** もいた。**Elisa Grimaillh**もレセギエに勧められサン=シモン主義の *Exposition* [学説解義] を読み、このグループに入っていた。

ツールーズ教会設立に大いに働いた砲兵隊長の **Hoart** は任地が変わってツールーズを去らねばなくなり、アンファンタンはシャルル・ルモニエを送り込んだ。**Bouffard** とルモニエはプロパガンダの仕事にとりかかる。ルモニエは学説解義を受持つ。毎日曜日、人々は大挙して集り、ホールも大きなホールに移動するほどになった。1000人ほどの聴講者に対してルモニエは45分ほど教義を説いた後、サン=シモン主義に反対する大学の教師たち、ツールーズ新聞の編集者、銀行家たちとの公開論戦が、3、4時間も続く。弱冠ルモニエが、次々と大胆な哲学、社会経済、道德の論理を展開して戦うさまに人々は拍手、足踏みで応援し会場は熱狂的に沸く。

§ サン=シモン主義の分裂

1831年11月、アンファンタンとバザールの両法皇の分裂のあと、翌12月18日にはアンファンタンが南仏に送った使節、**Bouffard**, **Hoart**, **A.Chevalier** がツールーズに着く。

その使節の一人オーギュスト・シュヴァリエはツールーズ教会の状態を次のように語っている。「我々が着いた時、教会は完全な分解状態にあった。テーブルにはレセギエ、ボレル、エリザ及びシャルル・ルモニエしかいなかった。階級の低いメンバーたちは立ち去っていた。意気沮喪がその頂点にあった。多くの離教者の手紙がアンファンタンにひどい打撃を与えていた。」

オアールとブファールは朝から晩まで個人的な会議を開き、徐々に気力を回復させていった。1月末までにオアールは、ツールーズ、ソレーズ、カステルノーダリの教会を次々と訪れて、ゆれる信仰をたて直し、勇気をおこさせた。

両法皇が枢機卿会で扱った問題はツールーズ教会ですでにルモニエがふれ、1831年11月末には「男と女」と題して小冊子を印刷していた。彼はそこで結婚制度の維持を結論づけていた。しかし両性の平等の原理と、うまくゆかない

夫婦のための解決策として離婚の自由を法律の中に導入することを説いていた。これらの結論はアンファンタンが提示しようとしていたものとはかなりかけ離れていたため、使節が到着した時彼は困惑していた。オアールの説得は救いであった。ルモニエは新しい教義に加担した。やがて彼は法皇からモンペリエ教会の指導を Ribes と分担するよう命ぜられる。

ツールーズを去る時、彼は信者の集会で次のような信仰告白をしている。「教義が今成就した新しい進歩を前にして、私はそれを受け入れる準備ができていませんでした。私は驚き、消極的でした。…神のおかげで、Père の言葉により、サン＝シモン信仰がよみがえりました。私は Père Enfantin に完全な信頼をもつことを宣言します。私はここで彼を人類の長と宣言します。なぜならアソシオンは法であり、人類の生命だからです。現在すべての人々に優って、我々の法皇は人々を結合し、アソシエさせる力をもっているからです。」

(Globe_1832年1月27日号)

オアールの努力によりツールーズの教会では1月15日に500人以上の聴衆の前で教義の再開が行われた。この時、ソレーズ教会の長ルモニエとカステルノーダリ教会の長 Toussaint がその両脇に席を占め、初期のキリスト教使徒たちを思わせる宗教的な会であったと、聴衆の一人が語っている。

1832年4月には、モンシニ街にいた婦人たちは大部分去っていた。アンファンタンは新しい使徒団を結成した。枢機卿会に昔のメンバーと Flachat, 第二階級にはルモニエの名もみえる。しかしアンファンタンが Menilmontant 僧院に37人の使徒をつれてひきこもった時に、そのメンバーには入っていない。

サン＝シモン主義の仕事に献身し、その長のためには「貧困も死さえも共にしよう」という人たちの中にも、彼らの居場所はメニルモンタンの僧院ではなく、旧世界の衣服を着、旧世界に交わって人々をサン＝シモン主義に導こうとしている人々も多くいた。ルモニエやブファールもその仲間であり、パリに労働者のためのプロパガンダ・センターをいくつかの区につくるべく活発に活動していた。

1832年1月5日、ラマルク將軍の葬儀の折、パリは暴動で血が流れた。*Les Saint-Simoniens* というマニフェストが Charles Lemonnier の名でパリの町に貼られた。

この声明書にルモニエはサン＝シモン主義の政治思想を要約し、組織された労働者による大きな公共工事の企画を提案する。

労働者たちを解放することの出来る現実の手段として、

- 1) 直ちにパリ・マルセーユ鉄道に着工すること。
- 2) 長年の懸案になっているパリに給水設備設置を実行に移すこと。これによってパリに下水道システムを装備することが可能である。
- 3) ルーヴルからバスチーユへの道路をつくること。
- 4) Mathieu de Dombasle 氏の率いる一万人の人々を西部諸県におくり、ブルターニュの開拓をする。
- 5) 徐々に軍隊を産業軍に変革して、各部隊は技術と職業の学校となり、兵士が軍隊を出る時はよき労働者となっているようにする。

これらの計画の実行に必要な産業会社の設立は容易である、これによる利益は巨大であるから。

8700万フランが毎年減価償却に失われているのである。その金額が公共に有益な、なんらかの大企画をひきうけたアソシアシオンに、投資した資本の $\frac{2}{100}$ ~ $\frac{3}{100}$ を年ボーナスとして10年、15年、20年の間分配されるべきである。この方法の効果は非常に大きいであろう。すべての人が富み、誰も貧しくならない方法である。(注1)

ルモニエがこのような演説をしている間、オアールは戦闘の最も烈しいサン＝タントワヌ街で、サン＝シモン家族の使者として平和へのメッセージを暴動者に伝えていた。

こうしてシャルルがアンファンタンの新理論を受け入れつつ、サン＝シモンの産業理論を労働者のために実践しようと努力している一方、妻エリザは、アンファンタンの新理論をおぞましいとして離教したと思われる。夫婦の間には考

え方の違いにより、かなりつらい時期があったであろう。1832年7月エリザはソレーズの母親のもとにあって、パリで使徒活動をしている夫に書いている。

「…エリザは自分がそのために働いている仕事を愛し、その確かさを感じずる時強いのです。でも心が肯なわないこと、理性が拒否することには屈することはできません。そのため身が砕かれても仕方ありません。私の良心の叫びはますます鮮明になって、より感じられるのです。これに従わないよりは、あなたの妻は最大の犠牲をも払わざるを得ません。私にとってあなたの考え、あなたの実行している使徒活動は非宗教的です。」

しかし夫をメニルモンタンの僧院にとられて離別を余儀なくされたCecile Fournelの心の葛藤はもっとつらい。セシルはエリザにこう書いている。夫との別れはつらいが、一つの目的に進んでいく夫のために犠牲を受け入れる。しかし夫たちを使徒生活にとられて悲惨な生活を送らねばならぬ貧しい妻たちの助力をすると述べているが、夫と妻をひきさき、女たちを無視したやり方に非難がこめられている。セシル・フルネルはエリザのMère(指導者)であり、身籠って田舎にいるエリザを本当の母のように面倒をみるから、連れに戻ったシャルルと共にパリにくるようにと切望している。更に数カ月後には、アンファンタンたちはHenry Fournelと共にエジプトに出発した。やがて女性たちもエジプトにくるようアンファンタンの指令がでると、セシルは夫と合流すべくいそいそとフランスを発つ。エリザに別れの手紙を書いているが、その調子はやや変わってきており、Pèreの仕事は偉大で立派なものであり、この事業はやがて成就されるだろうと讃えている。しかし、子供を残してゆかねばならぬ苦しみを訴えている。

一方エリザがMèreになっている女性たちの書簡ものこっている。Hermance Déjeanは、エリザがPèreの理論を肯定しないことに救われた思いをしたと述べ、この理論を受け入れるより酋長の奴隷になった方がましだと書いている。Suzette Terrietは、サン＝シモン宗教に嫌気がさしてカトリックにすっかり戻ったこと、Véturie Espagneは、二人の法皇の分裂とPèreの新理論に呆然自失の状態が長い間つづいて、何夜も眠れなかった。その新しい信仰に対する嫌悪感

がますます増大していったが、アンファンタンと会い、彼が非常に宗教的であること、人類を幸福と秩序へ導こうとしている真摯さを知ったことなど、いろいろの反応がある。エリザ自身はこの理論に背を向けながらも、完全に Père と訣別したわけではなく、10年後の1845年にはアンファンタンに宛てた二通の書簡が残っている。

§ 『女性の未来』

1831年8月シャルル・ルモニエはレセギエの同意を得て、「女性の未来」と題する公開講座を開いたことがあったが、これが後に小冊子にまとめられている。シャルルはこの多くのページがエリザによって書かれたと述べているので、そのポイントを要約しよう。*Religion saint-simonienne, Eglise de Toulouse, Avenir de la femme.*と題されている。

エリザは男女の異質性を重要視する。男女が等しく、同等のものであるなら両者の協業は不可能である。知性面でも、道徳面でも男と女は補完しあって一体となるようできている。男は女よりエネルギー、慎重さ、力を持ち、女は男以上に献身、直観、器用さにおいて優れているという伝統的見解をもっている。異なった二つの存在に同じ役割、同じ能力を要求し、同じ教育を与えるのは人間の性情にそむくものである。

歴史的には、野蕃時代、女性は虐待され、奴隷的な立場にあった。キリスト教の到来によって苦しむ者に慰めと救済が与えられたが、女性と奴隷は不完全な解放しか与えられなかった。精神的自由は得ても、肉体は時代の鎖につながれていた。キリスト教が女性を寺院と国家の敷居までつれてきたとしても、女性はキリスト教によって追放された物質の人格化であった。たとえ女性が神を生むべく選ばれたのだとしても、罪も女性によって世の中に来たとされている。現代では古い呪いはほとんど消えたとしても、長い服従の最後の名残がいたるところにみえる。この世界はなおキリスト教と中世の残骸からつくられている。社会的進歩は男女の協業における進歩でなくてはならない。女性は社会的役割

を果たさねばならない。即ち女性に特有な美德と長所が今までのように血縁の家族の中だけでなく、社会的家族の中に拮げられねばならぬ。

男と女は、普遍的仕事、最も数多い人々の精神的、知的、肉体的改善に参加しなければならない。未来においては女性は政治をすることができる。何故なら政治をすることは、自らを愛させ、理解させることである。

さて女は産業において今まで最も能力を示してきた。これは産業の研究が緒についたばかりで、男性社会構造がまだ確立されていないからである。社会も教育もこの面では男性の発達に味方し、女性のそれをおくらせることはできなかった。ここではより男女の機会均等がみいだせる。

確かに教育の不備により、男性より能力の発達をさせることはできなかった。女性に対する非難は大部分その教師になされるべきである。女性は男性の疲れを癒すためのおしゃべりや芸事のみ教えられてきたのだ。

これからは男のための教育でなく、女性を完全に自由な発達をさせる女子教育がなされるべきである。

未来の女性のモデルとして、有名女性たちの名をあげようとは思わない。彼女たちの頭上に重くのしかかる屈辱の暗い天蓋をつらぬいてそこまでに至った女性たちは、自らを男にせざるを得なかった。しかし彼女たちは女であることをやめようとしても、男女の違いはあまりに大きいので、男になることはできなかった。彼女らは自らを怪物にしたし、とりわけ不幸な女にした。

サン＝シモン派の女性がそのモデルとすべきは、これら天才と不幸の特権をもった女性たちではない。たしかに彼女たちは、女性には発達しうる強い力があり、彼女たちの仕事は我々の性の蔑視に対する有益な抗議となる。しかし解放の時がまだこなかったので、彼女たちは男性のライバルであって、アソシアシオンでなかった。

国家が一つの家族となるであろう時、経済学は家庭経済学となり、血縁の家族の母は更に人類の家族の母となるだろう。

このような進歩が完成されるには、女のみがその美点を発達させるのでなく、男がキリスト教によって定められた道徳に到達すべきである。教育と社会が今

日まで男に対してすべてをなしてきたのであるから、男性が女性に手をさしのべて、その傍らに席を作り、自らのアソシアシオンにふさわしくあらねばならない。

エリザにとって未来にふさわしい女性とは、女性の能力を十分に発達させる教育をうけ、家庭においても、社会においても男性と協同して働ける女性、ということになるだろうか。

扱シャルルはアンファンタンの *Appel à la femme* に要約される新しい理論を熟考した後、これを受け入れ、サン＝シモン伝道を続けたことは前にも述べたが、サン＝シモン派裁判の折は、シャルルもアンファンタンを支える熱狂的な信者たちの行列に加わって裁判所に行った。しかしこの裁判によって伝道が禁止されたこともあり、世間にもどって法律の勉強を続け、ボルドーの弁護士となる。このサン＝シモン宗教のために彼ら夫婦は蓄えた 50,000フランを使ってしまったので貧しい生活を余儀なくされていた。最初の子供を亡くし、第二子を得たところであった。ルモニエ家はボルドーで10年ほど切りつめた生活を送っていた。エリザは家計を助けるために下着類屋を始めようとしたが、弁護士の妻にはそれが許されない世間の常識に阻まれた。

§ エピソード二題 Suzanne Voilquin と Flora Tristan

サン＝シモン裁判のあと、エジプトに赴いたアンファンタンたちの後を追ってエジプトに向かうため、シュザンヌ・ヴォワルカンは南仏を廻ってサン＝シモニアンたちから寄付金を募っていた。シュザンヌは Taitbout 公会堂でエリザを見かけただけだったが、好感をもっていた。その後彼女の編集する *Tribune des Femmes* 紙に関して文通を始めたと述べている。彼女がソレーズに来てルモニエ夫妻と過ごした三週間について、*Souvenirs d'une fille du peuple ou la saint-simonienne en Egypte* の中で、彼女の人生のオアシスであったと語っている。エリザのやり方はいつも威厳と善意に満ちみちていた。すべての人々に友情と気使いをふんだんにみせてくれるエリザ、しかしそれが実に自然に行わ

れるのである。この三週間彼女たちは遠足に出かけたり、一緒に読書をしたりした。その書物の中にはサンドの *Jacques* があり、ルモニエはその感想を雑誌 *Revue du Midi* に送ったと書いている。

もう一人のミリタント、フロラ・トリスタンは1844年、ルモニエ夫妻がボルドーに住んでいた時、*Union ouvrière* の小冊子を携えてのフランス一周の旅の終わりにこの町に着いた。労働者たちに *Association de travailleurs* を結成させるべくプロパガンダの旅であったが、ボルドーで力つき、病の床についた。リヨンでフロラに心酔した弟子、洗濯婦の *Eléonore Blanc* も駆けつけた。しかしややもち直したフロラをみて、エレオノールはリヨンに一先ず戻るようになった。エリザたちは彼女を献身的に看護するが、再びフロラに心配な症状があらわれ、エリザはエレオノールに手紙を送る。「病人はだんだん弱っています。たえず譫妄状態がおこっています。」「あなたの友は彼女をとりまき面倒をみている人々の愛をひきつけることができました。それは人が受ける並みの看護ではありません。心の底からでるものです。アルフィン嬢は、一人の看護人としてではなく、妹のように枕もとで泣いています。最も愛情にみちた手当が惜しみなく施され、全ての人がある義務を果たしています。」フロラの死後、シャルルはデスマスクをつくった。「彼女の思い出が労働者たちの間に生き、彼女は聖女となり、彼女の墓がフランス一周の聖なる巡礼地になるべきです。」彼は記念碑を建てるべく募金を始める。4年後、革命の年にその記念像がボルドーに建てられた。

§ 二月革命

ルモニエ一家は三女をまた亡くし、エリザは将来の夢を託した愛らしい娘の死に悲嘆にくれている。アンファンタンは彼女を慰める手紙を書いたらしく、彼女はその心暖まる手紙に感謝をこめて返事を書いている。そのP.S.にPèreのすすめによってPéire兄弟の北部鉄道会社の訴訟係長の職がシャルルに与えられたことを知らせる手紙を受け取ったことを記している。こうして1845年、彼女は再びサン＝シモン派の仲間がいるパリに住むことになった。

1848年、革命の勃発と共にサン＝シモン派に属してていた女性たちと協同して活動を始める。革命のあと、何千という労働者が失業した。彼女は失業女性を救うため、何人かの献身的女性に助けられて Faubourg St Martin に縫製作業場を創設し、病院や監獄の納入品を請負った。前借をし、布地を買い、帳簿をつけ、配分し、監督し、納入し、休む暇もなく活動をつづけ、遂に2ヵ月の間200人以上の母親に仕事を与えることができた。

昔のサン＝シモン派の再会の場となった Niboyet 編集長の *Voix des Femmes* 紙の催した公開集会在4月2日にあった。その模様が紙上に報告されている。議長ニボワイエが生活に必要なすべてのものをもつ施設の設立を提案する。ルモニエ夫人がこの計画はすでに政府に提出してあり、検討中であると述べる。そのあとの議論で Mme Villimet が政府は男性失業労働者のために多額の金を使っているが、生活費もない多くの女性労働者の面倒をみる必要があるので、国立作業場をつくることを要求したいと言う。洗濯婦たちが広場に集まって時間短縮と賃金の値上げを要求しにいったことを報告し、各職業毎に集団で政府に要求をもっていくべきだという発言に、議長は洗濯婦の備用主はこの要求に譲歩した結果、多くの女性労働者を解雇したのであり、現状ではこの二つの要求は失業を招く危険が大きいと述べる。ヴィリメ夫人が洗濯代の値上げを提案すると、ルモニエ夫人は、多くの人々が生活費の一部を失い、自分で洗濯をしたり、女中に上物の肌着類を洗わせたりしている現状を説明し、洗濯婦の失業につながる危険性を説く。女性労働者は連帯し、集会をもつべきだが、それは産業的利害のためと、彼女たちを援助するための手段を研究することにのみ限定すべきであると、ラディカルなやり方を牽制する。Mme Gay もこれを支持し、女工たちが職業別に集会をもって互いに理解しあい、利害を議論すべきであると述べる。ルモニエ夫人はここで、女主人の搾取から逃れるために、政府の指導のもとに大きな国立作業所を設立してほしいという一女工の手紙を紹介する。

更に4月4日号には、E. Lemonnier, C. Lapointe, S. Voilquin の名で「労働組織委員会メンバー」へ Faubourg St Martin に労働者のための託児所建設を陳情している。この陳情は次のようである。

「共和国の到来は、アソシアシオンと友愛の原理の到来であり、我々全員が新しい義務を負っています。男も女も力の限りこの大事業に協力しなければなりません。19年間私たちが全努力をかたむけて求めてきた社会の再生が実現したのであり、私たちは民衆の悲惨さを和らげるべく懸命に働いております。大きな仕事はできないのですが、Faubourg St Martin 地区の労働者のための託児所の創設に盡力しております。

今日労働者階級の生活を向上させうる幾多の方法がありますが、その一つとして、風通しよく、清潔で、経済的な大きな共同住宅を提供することを提案します。こうした家を一軒試みに建てれば、その有利さが直ちに証明されましよう。

以下に私たちが考える家の配置を簡単に述べます。一階は託児所、養老施設、読書室、浴場、洗濯場、食堂、管理人室。地下には全室への暖房装置、その上にオーブンをつくり、各家庭が10サンチームを払って料理ができるようにします。大きな中庭をつくります。二、三階は子供のある家族のアパート、四階は独身男子の部屋とします。

労働者の家族はここで施しの世話にもならず(施しは受けるものには屈辱的、与えるものには虚栄心のもととなるので徐々に廃止すべきである)現在の家賃のままで住め、託児も老人の世話も、読書も、暖房も多分燈火も得られ、洗濯も安く出来るでしょう。

ここに住みたい労働者たちは救済基金を払う義務をもち、これによって医者、産婆を確保でき、病気の間最小限の保障が得られます。

女子の職業学校が、家族の目の届くところで開かれるようにします。講義は毎晩託児所にてなされるでしょう。

こうした性質の施設は、社会の協力のもとに安価な食品を手に入れられ、やがて労働者の苦しみを真に改善でき、未曾有の且、有害な恐怖をしずめるのに貢献できるでしょう。

もし政府が、この施設が我々の考える利益をもたらすと感じ、我々を支持して、土地を与えるなり、株主にその資本の保障をして下さるなら、我々は一株5

フランの株を20万株に分けて、必要な100万フランをつくることのできるでありましょう。」

文章が不馴れで、錯綜したところもあるが、Faubourg St Martinの女子縫製作業場の傍にもう一つの労働者のためのH.L.M.をたて、フーリエ派のファランステールに似た共同住宅を思い描いている。おそらく共和国の成行きからしてもこれは実現できなかつたであろう。しかしこうした試み、経験が積み重なって、後に女子職業学校の発想へつながっていったのである。ふとんを縫うことは容易な仕事であるはずであるが、それさえ、エリザをとりまいた作業所の女工たちは満足にできるものは少なかつたのである。

また、Jeanne Marie Monnier, Suzanne Voilquin, Angélique Arnaud, Céléstine Lapointe, Jeanne DeroinにまじってElisaも創立者の一人になっているSociété Fraternelle des Ouvrières Uniesという協会の定款がのこっている。その目的は主に女子労働センターの創設と女子見習いを養成することにあるように思われる。

労働センターは女工と家庭夫人からなる顧問委員会があり、何人かの役員と代表をもつ三つのグループに分かれ、一つは作業場の労働の管理、一つは仕事探しと原材料の購入、生産物の売さばき、三番目は経理となる。作業場は10人づつの女工のグループをつくり、5人は教えることのできるもの、5人は見習いという組織にする。労働時間は10時間、そのうち1時間は食事とリクリエーションに、2時間は協会の創設する特別無料授業にあてる。その講義は3年間あり、次のようなカリキュラムになっている。(これはエリザの女子職業学校のプロトタイプともいふべきものであろう。)

一年目、読み書き、文法、計算、地理。

二年目、綴り字、歴史、地理、簿記、用器画、声楽。

三年目、応用幾何、植物学、化学の初歩、衛生。また女性と祖国を大切にするために女性史を学ぶ。

これは実行に至らなかったようだし、またずっと後になって、やはり託児所設立のため、パリの他の施設を見学したりして研究している。いくらかの資金も集められたが計画の実現ができず、寄付金は返還された。

更に死刑廃止に票を投じてくれた議員に対する感謝を表明する文書がある。1848年11月24日付で **Aline Juif, Elisa Mornet** が会長、副会長をつとめるリヨンの **Compagnions du travail pour les femmes** という団体が主体となって67名の女性が署名している。その中に **Eug. Niboyet** や **Elisa Lemonnier** が入っている。(appendice 2)

エリザの政治参加のもう一つの例は、1851年ルイ・ナポレオンのクーデタの折のことである。エリザは友人と二人でパリのノートルダム大司教 **Mgr Sibour** を訪れ、内戦を止めるよう力を借してほしいと歎願した。司祭たちをノートルダムに集め、十字架をかかげて平和の行進をしてほしい、私たち女性も老若を問わず、子供をつれて、一緒に軍隊の前に参りますというエリザの一途な願いも **Mgr Sibour** は耳をかさなかったようである。

§ 女子職業学校

1833年、男子の義務教育化が決まり、小学校の設置が義務づけられた。しかし女子校は1850年になってやっと800人以上の町に有料の学校ができた。

1848年に **Carnot** が文部大臣となり、男子校女子校を同数にすること、更に女教師のエコール・ノルマルをつくることも考えたし、**Collège de France** で女性の条件を高める方法を考えるために **Ernest Legouvé** に講義を依頼していた。しかし1849年5月13日の選挙で保守派の勝利の結果、カトリックの力が議会で強くなり、文部大臣はロワイヤリスト **De Falloux** と代わり、教育は僧侶の手にゆだねる法がつくられた。

エリザが職業学校設立にふみきるまでに10年の歳月がたった。彼女は前回扱ってきた女性たちのように文章もあまりうまくないし、弁論も達者でないが、強い意志と実行力をそなえている女性のようなのである。彼女は両性の平等という言葉は女子の教育なくしては、空しい言葉に終わると確信していた。とりわけ貧民階級や中産階級の娘が、若いうちに家庭から離れて様々の危険を冒して、工場へ職業訓練にゆかねばならぬことに心をいためていた。貧しい娘たちが職業教育をうけられる女性組織をつくり、女性の尊厳と独立を保障しうる女性の仕事の範囲を徐々に増していくことが彼女の願いだった。

最初 Francfort sur Mein の近く Reidelheim で Mme Hillebrand がその立派な学校に例外的なよい条件で二人の娘を寄宿生にしてくれるのを援助したことから始まった。ルモニエ夫人のサロンには18人の夫人が集まり、Protection maternelle という協会を設立した。無料でできる限り多くの貧しい娘たちに職業教育を授けたいという目的をもっていた。1856年の設立以来7人の少女がこの協会の世話によって教育を受けることができたし、さらにもう一人教育されつつある。1862年5月末にこの協会が Société pour l'enseignement professionnel des femmes (女子職業教育協会) と規模を拡大するまでの6年間にあつめられた献金は1万フラン近くにのぼる。

新しい組織は(1)パリに女子職業学校を設立すること。(2)商業に携わってきた成人女子に商業の種々の備用を準備するための講義をもうけること。これは今日までそうした特別の学校は存在しなかったのである。こうした趣旨で創設された女子職業学校に資金面で援助した人々は多く、特にサン=シモン派の人々のうちには、アンファンタンの親友であるリヨンの大企業家 Arlès Dufour や Germain Henry, H. Carnot, Michel Chevalier, d'Eichthal, Péreire 兄弟, Talabot, ジャーナリストや経済学者, Edmond Adam, B. St-Hillaire, Bixio, Henri Martin, Dumas Père, P. Viardot などの外、フリーメイソンの中のいくつかの支部などもある。

ルモニエ夫人の名で rue de la Perle 9 番地に場所を確保し、講義のプログラムが決まった。経験豊かで知識の広い Mme Marchef Girard が新学校の校長と

なり、あらゆる細部まで熱心に監督した。自身で15人の最初の生徒を入学させた。成功はまたたく間に得られた。この真面目な教育の意図は理解され、2ヵ月後には50人の生徒が勉強していた。7月には更に80人となり、縫製作業所が開所され、Aimé Paris氏が無料で音楽を教えることを申しでた。

はずみがついて2年目には生徒数は150人にも及び、教室は手狭になった。多くの人々の心暖まる援助により学校は rue Turenne の庭のある広い建物に移転した。それだけでなく、同様の学校を建ててほしいと多くの地区から要望が相次いだ。ルモニエ夫人は rue Rochechouard 72番地に第二の学校を開設し、校長には協会会員の一人 Mme Clarisse Souvestre に就任してもらった。

学校のカリキュラムは共通して全生徒がとる一般教科——国語、算数、歴史、地理、物理、化学、衛生、博物学入門、絵画、装飾画、書方、声楽などで三年間学ぶ。

専門科目として、商業、簿記、商業用算数、商法入門、英語、用器画などがある。

作業場としては、洋裁作業所、既製服作業所、木版画作業場、陶器絵作業所などがつくられた。

講義以外に協会の婦人たちは毎週順番に読書会を催した。この読書会は大へん好まれて、子供たちの適応性、趣味、性向があらわれ強化される。

宗教教育は家族にまかせられた。どの宗教の信者も無差別に入学を許可し、学内で何のトラブルもおきない。生徒たちは皆互いに他人の信仰に敬意を払うようになる。

学費は一ヵ月10フラン、講義の数、バラエティをみれば安価であった。しかし協会は学校間の競争や無料奉仕をさげ、できるだけ持続できるような体制をとる。奨学金、半奨学金、 $\frac{1}{4}$ 奨学金などの制度があるが、かなりきびしく適用する。

女性解放の唯一の道は、女性特有の資質を充分発達させることであると固く信じていたエリザは、「15年後には、私たちの女生徒たちが一家の母となり、私たちよりよく息子を育てられるでしょう。私たちの努力と例が彼女たちの心に

残り、自分自身の尊厳という習慣が彼女たちの生活を強くすることでしょう。女子のよい学校をつくることは、母の仕事ですが、社会の基礎工事でもあります。」と言っていた。

カステルノーダリのサン＝シモン教会長の娘 Julie Toussaint はエリザの最も信頼する若い友であるが、彼女に宛てた手紙にこう書いている。「作業所の組織をしっかりとすること、これが私たちの事業の中心です。すべての職業学校はやがて産業組織になるべきです。学校は自らの収入で生きて大きくならなくてはなりません。私が今30才であれば、健康であれば…」

また次のように彼女の信念を披歴している。

「Mme Daubié が演壇で扱った問題(女性の職場を増やすこと)を私たちの一人が職業教育の問題とすることは有益です。私たちは未開の地にいるので、道を自らつけなくてはなりません。女性にとって最も有利な職を探すことが私たち協会のたえざる関心でなくてはなりません。商業講座の有益さを家庭では認識していませんが、これをはっきり強調させなければなりません。ジャーナリズムには善意の友が多くいて、この教育の有効性について特別の論説を書いてくれています。すべての女子校には商業の教師が必要です。女子に往々にして欠けている精神的秩序と正確を与える教育が必要です。…」

Eug. Niboyet の新聞 *Journal pour Toutes* にもエリザの学校の生徒の一人が描いた銅版画が使われていることが記されている。

エリザは体が弱く、パリに滞在することがだんだん難しくなり、一年の大部分を南仏の療養所で過ごすことになる。

二度目の卒業式に、そしてエリザには最後になった卒業式に出席して彼女は、彼女の設定した優秀賞を授与する。この生徒はなんと民主的なことに生徒の投票によって決められるのだ。これは生徒たちの比較の能力と判断力を信頼し、生徒たちの理想の立派な人として選び、自分も見習いたいという気持ちをおこさせると言う。

「皆さん、一つの感情がこの祝典を飾っています。それは連帯の感情です。私たちは皆人生において連帯し、協同しています。あなた方はこの友愛の連合を、学校のコミュニオンにおいて、労働のアソシアシオンにおいて、あなた方の力の応用においてこの友愛の連合を始めたのです。……」サン＝シモン主義的信念がなお連綿と彼女のうちに健在する証左であり、ロマン主義的ユートピスト時代の一つの遺言である。

数日後、彼女は病に勝つことができずこの世を去った。

§ 女子教育について —— 補遺

当時の女子教育についての論議がカトリック司祭側とそれに反対して教育を宗教者の手から奪おうとする側とで戦わされているのでこれを一瞥したい。

1863年より6年間ナポレオン三世の命により文部大臣なった Victor Duruy は、ローマ及びフランスの歴史、とりわけ政治地理、歴史地理を重視した著書を次々と著わしていた歴史家であった。この6年間に彼は教育に関する法律、訓令を精力的に発令して教育改革を行っていった。特に女子教育に関しては、1867年4月10日法で、500人以上の住民のある市町村には少なくとも公立女子校を一校を有することを義務づけた。男女混成校では、市長推薦により、知事が裁縫の女教師を任命すること、その手当は知事が定めるとある。教育科目にはフランスの地理と歴史を必修科目としている。

更に5月12日の知事への訓令で4月10日法を細部にわたって説明している。県財政の圧迫に対する点などいろいろ考慮して、どうしても予算の足りない県には国の助成があるとか、裁縫女教師はその学校の教師の妻であってもよい、その方が経済的になるとか、またその女教師は人格的に立派な人でなくてはならないとか細々と説明している。生徒数の多い学校は第二校をつくらなくてはならないとか、牧畜に従事して村を移動する人々には、教師もまたそれにつれて学校を移動することなど、各地の事情にあった指示がある。

更に1867年10月30日の訓令は学校長に宛てたもので、まず一万校の小学校増設の予定を述べ、各界の期待に沿うつもりであると言う。しかし校舎の建設

と教員の養成に時間と財源が必要だが、これも満足のいく解決をみいだすであろうと述べている。

この回状のポイントは三つあり、第一は *classe de persévérance* (キリスト教の継続要理教室) とデュリュイが呼ぶもので、小学校在学期間の延長を働きかけることである。多くの小学生が12才(聖体拝領の年)でやめてしまう傾向がある。プロテスタントの国では通常15~16才まで教育を受けている。このクラスでは各地の事情に応じた選択制の職業講座をおくことである。例えば商業地域では、書法、暗算、簿記、会計等々、産業地域では装飾用図案、機械製図、用器画等々、女子校にも小学校高等科ともいべき *classe de persévérance* が必要で、家庭の裁縫、農園用語、暗算、農業知識、菜園、果樹園、家畜飼育場の指揮、家庭の衛生などを教える。

このために学校長の影響力を発揮して、とりわけ労働者階級の子女のために、職業学校として組織し、彼らに知識を与え、給与改善に役立たせること。また *comité de patronage* (後援委員会) をつくって、学校を出たあと、よい条件で仕事をみつけてやること。

第二のポイントは *enseignement seondaire des filles* (女子中学校) の設置である。1865年6月に定められた男子の *enseignement spécial* (特別学校) と同じものを女子のためにもつくろうというものである。課目はラテン語だけは除いて男子と同じもの、一般文学教育、外国語、絵画、科学実験などで、14~18才くらいの女子を対象に男子と全く同じ教育者によって行なわれる。1年に6~7カ月、1日1~2レッスンのわりで3~4年を目途とする。宿題が課され、1カ月に一回作文を提出する。この課程は試験によって進級し、全課程を終えると免状を授与する。講義は市庁舎のホールで行なわれ、母親や家庭教師の付添もみとめられる。有料で月額15~20フランとし、その $\frac{1}{3}$ 乃至 $\frac{2}{3}$ が教師に支払われる。

こうして教員も建物も既存のもので間にあうから、リセのある80の市、コレージュのある260の町ですぐに実行できるはずである。

Duruy のこうした矢継ぎ早の意欲的な改革案はもちろん司祭側の女子教育に対する特権をおかすものとして、猛烈な反対運動が展開された。その先頭にたつのが、オルレアンの司教 Dupanloup である。特に1867年末に良家の令嬢のための特別講座、講演会を開いたこと、皇后もまた姪たちをつれて出席したことなどが、司祭たちを刺激して地方の司祭たちも声をそろえて反対運動をおこした。法皇ピオ9世もデュパンルー師のデュリュイ批判に声援をおくっている。

Mgr Dupanloup は *Femmes Chrétiennes et françaises* (1868) や *Seconde lettre de Mgr l'évêque d'Orléans sur M Duruy et l'éducation des filles* (1867) などで、自由思想家たちの陰謀即ちキリスト教徒の敵たちが社会における妻や母の影響がいかに大きいかを知って、女性を支配しなければ、宗教に対して何でもできないと考え、女性の信仰を失わせようとあらゆることを陰謀していると述べている。10年前から宗教に対する攻撃を烈しくしている新聞として、*Temps*, *Opinion Nationale*, *Avenir National*, *Débats*, *Courrier Français* などをあげている。その陰謀の元凶と下部組織を知っていると述べている。Duruy の役割、サン=シモン主義の自由女性、Michelet, Quinet, *Revue des Deux Mondes* に掲載された *Mlle Quintinie* をはじめとする Sand の数々の小説、同誌の Jules Simon の数々の論説などを槍玉にあげている。

デュパンルー師はデュリュイの法案や訓令を細々とみみつつく批判しているのだが、

「Duruy 氏は小学校をでると、男子はリセ、特別教育学校、あらゆる種類の自由学校があつて、若い知性を充分発達強化させている。女子教育もこの進歩の中にあつて停滞してはならない。」といい、「フランスには女子の上級学校は存在しない」というが、デュパンルー師は女子も小学校をでれば、特別教育学校も寄宿学校、半寄宿学校などあらゆる教育機関があると反論する。彼の特に認めがたいことは、女子教育は男性ではなく女性にまかされるべきであること。若い女性が市庁舎などにいって、リセの男子教員に教えられるべきでない。農業振興会の会場などで副知事によって、賞を与えられるために粗野な人々の前に出るのは若い女性のすべきことではないという。

教師たちは文学を教えれば、文体ではとどまらず、その理論にまで入り、彼らのお気に入りの文学者といえば、Rabelais や Voltaire, Béranger, Montaigne などであり、公開講座で令嬢たちの前でこうした作家の下品な主題を教師が扱っているのを知っていると述べている。

更にデュリュイの回状に拍手をおくる新聞記事をいくつかあげている。*Siècle* 紙は「デュパンルー師は将来自由思想女性がつくられるのではないかと疑問であるというが、我々は勿論そうなると考える。自由思想女性の出現により、迷信ともおさらば、司祭に導かれた聖処女信心会ともおさらば、ローマ法皇への献金もおさらば、…」 「デュリュイ氏はできるだけ早く女子高等師範学校をつくるべきだ。あらゆる進歩の障害となっている敵にうち勝つために、一つの手段しかない。女性を教育して、彼女たちが若い女性を教育し、自由思想女性をつくることだ。」と書いている。

また *Opinion Nationale* 紙はデュリュイ氏の回状の目的は女子教育を宗教から、カトリックから、教会からとりあげることであると述べ、「女性の非宗教教育」を組織することと呼んで歓迎している。「これこそがこの国の重要問題である。事実司祭がフランスのすべてを女性によって掴んでいる。司祭は女性を教育によって掴んでいるのだ。大多数の少女は修道女によって教えられている。これによって、我々の家庭で司祭が主人顔をして、家庭内のあらゆる所に影響を働かせている。」等の論説をいつもあげ、Duruy 法による宗教教育の危機に警鐘をならしている。

こうした社会状況の中でエリザの非宗教的職業女学校はデュパンルー師の攻撃の対象となっており、アンファンタンの親友であった大実業家の Arlès-Dufour は *Réponse à M. Dupanloup* と題するパンフレットで、エリザの学校とサン＝シモン主義の弁護をしている。

「…あなたは非常に率直に、「女子職業学校」「教育リーグ」「成人学校」「自由講座」「医学校」「マテリアリズム」「上院の自由思想家たち」「フリーメイソン」「ポジティヴィスム」「サン＝シモン主義」等を攻撃してられる。と

りわけ女子職業学校にむけられた小冊子の文には、あなたの宗教感情が、知性の養成とか知識の拡大と相容れないことを最も素朴な形で表明されました。あなたがこの学校やこの設立者に発想を与えたであろうサン=シモン主義を許すことができないのは、次の格言を明確にしたからです。『長い屈従から女性は立ち上がり、平等の原理にたつて、自由教育の恩恵をうけて、その能力の完全な発達をめざし……』」

こうしてアルレス=デュフルはサン=シモン主義が如何に真の宗教であり、現在のカトリックが如何に神の道からそれているかを述べる。

彼は前述したようにエリザの学校設立に多額の援助をしている一人であるが、彼自身もリヨンに職業学校や男子と女子の高等小学校などを設立し、労働者階級の生活条件の向上に取り組んでいる。

またデュパンルー師に攻撃されている Jules Simon もまた *l'Ecole* の中でエリザの仕事を讃えていることをつけ加えよう。

(完)

注1. Mathieu de Dombasle は農業家(1777~1843), 鋤の見本を発明し、開墾の方法を改良した。また農業教育に大いに努力した。

Bib. Arsenal fonds Enfantin 7861 B

注2. Mme Daubié

Tubé-Victoire Daubié 最初の女子のバカロレア試験合格者となり、1871年に学士を取得、博士論文を準備中の1874年死ぬ。

Bibliographie

Charles Lemonnier; Elisa Lemonnier, fondatrice de la société pour
l'enseignement professionnel des femmes 1866
Saint-Germain

Mme Coignet; Biographie de Madame Lemonnier 1866 S.P.E.P.F.

Religion saint-simonienne, Eglise de Toulouse; avenir de la femme

Religion saint-simonienne, Ch. Lemonnier aux correspondants des
départments 1832 juin

Charles Lemonnier; Terre et ciel (extrait de la Revue du XIXe siècle)
dec. 1854

Suzanne Voilquin; Souvenir d'une fille du peuple ou la saint-
simonienne en Egypte 1978 Maspéro

Henry d'Allemagne; Les saint-simoniens 1930 Grund

Marie Cerati; Femmes extraordinaires 1979 éd. de la Courtille

Georges Duveau; Les instituteurs éd. Seuil

Françoise Mayeur; L'enseignement secondaire des jeunes filles sous la
Troisième République 1977 PFNSP

Mme Juliette Adam; Souvenirs II 1855-1864 Alphonse Lemerre 1904

Michel Chevalier; Deux défenseurs de la liberté commerciale MM.
Arlès-Dufour et Combes

C. L. : Arlès-Dufour Guillaumin

Victor Duruy; Administration et Instruction, circulières

1867 30 oct

1867 10 avril

1867 12 mai

Mgr. Dupanloup; Seconde lettre de Mgr. l'évêque d'Orléans sur M. Duruy
et l'éducation des filles Charles Douniol

Mgr. Dupanloup ; Dernier réponse à M. Duruy et ses défenseurs 1868

Mgr. Dupanloup ; M. Duruy et l'éducation des filles 1867 Charles Douniol

Arlès-Dufour ; Légataire universel de P. B. Enfantin ; Réponses à Mgr. Dupanloup, membre de l'Institut, évêque d'Orléans sur la lettre à un cardinal dénonçant les écoles professionnelles des filles, la Ligue de l'Enseignement, les cours publics autorisés, le matérialisme et l'école médecine de Paris, les franc-maçons, les positivistes, les saint-simoniens. 1868 Dentu

Jules Simon ; L'école 1865 Lib. International

Périodiques

Voix des Femmes

Journal pour Toutes

Journal des économistes 13 mai 1872

correspondances d' Elisa Lemonnier (manuscrits) Archives nationales, B. H. V. P., Bibliothèque de la Châtre

Dictionnaire biographique du mouvement ouvrier français, sous la direction de Jean Maitron

Grand Dictionnaire universel du XXe Siècle

appendice 1

A Monsieur le Président du
Club des Républicains-socialistes

Monsieur le Président

Nous avons l'honneur de vous remettre ci-inclus la note que le Club des Républicains socialistes a bien voulu nous demander sur le projet d'ateliers que nous fondons pour les ouvrières-unies.

Nous vous prions, monsieur le président, de vouloir bien remercier le Club de l'accueil bienveillant et plein de sympathie que nous avons reçu dans son sein.

Agréez, monsieur le Président, l'expression des sentiments de notre considération distinguée,

Jeanne Marie Monnier no.1 rue de Boulogne

Elisa Lemonnier rue de Chabrol 10

Suzanne Voilquin rue Félicité 21 bis

Angélique Arnaud rue Paradis Poissonnière n.4

Céléstine Lapointe

Jeanne Deroin Desroche

Note

sur la Société fraternelle des ouvrières-unies

Considérant que l'association et le travail étant les seuls moyens de régénérer le genre humain et d'ouvrir aux femmes une large voie pour conquérir honorablement et pacifiquement le rang qui leur appartient dans la famille, dans la cité et dans l'Etat.

La Société fraternelle des ouvrières-unies se propose de fonder des ateliers pour exercer diverses professions, une crèche, une salle d'asile, une école, une bibliothèque dans un vaste local qui a été promis provisoirement, à cet effet par le maire de 5^{ème} arrondissement. Des cours spéciaux pourront y être également ouverts pour les ouvrières adultes.

Un conseil d'administration sera formé, il déléguera ses pouvoirs principaux à un comité de direction. Ce conseil et ce comité seront composés de dames et d'ouvrières.

Trois déléguées assistées de plusieurs commissaires seront chargées.

l'une de la direction du travail des ateliers

l'autre de la recherche du travail, de l'achat des matières premières, du placement des produits.

La troisième de la caisse et de la comptabilité.

Ces ateliers seront distribués en groupes de dix ouvrières dont cinq enseignantes et cinq apprenties, ces groupes seront payés collectivement aux pièces, le salaire sera divisé entre ses membres, suivant le travail de chacune dans la proportion fixée par le conseil d'administration.

La journée sera de dix heures, une heure sur ces dix heures sera donné pour le dîner et la récréation; deux heures en plus seront consacrées à l'enseignement gratuit qui leur sera donné dans les cours spéciaux fondés par la société.

La première année on enseignera la lecture, l'écriture. la grammaire, le calcul, la géographie.

La 2^{ème} année l'orthographe, l'histoire, la géographie, la tenue des livres, le dessin linéaire, et la musique vocale.

La 3ème année on donne quelques notions de géométrie appliquée, de botanique et de chimie en vue de l'hygiène, l'on étudiera l'histoire des femmes qui ont honoré leur sexe et leur patrie par leurs vertues et leurs talents.

Lorsque les ressources le permettront on mettra plus d'équilibre entre les heures employées au travail manuel et celles qui seront consacrées aux travaux intellectuels; les soins à donner à la crèche, à la salle d'asile, pourront en se combinant les travaux de l'atelier procurer un délassement avantageux

Le capital sera formé par souscriptions.

Les actions seront de 5 f.

Les dons seront employés aux premiers frais d'établissement.

Les frais prélevés, les bénéfices seront ainsi répartis.

Un quart destiné à fonder une caisse de secours mutuels

un quart au travail

un quart au capital

un quart à la société pour la propagation et l'étendue de son oeuvre.

appendice 2

Aux citoyens représentants du peuple qui ont voté pour l'abolition de la peine de mort

Citoyens représentants !

Au nom de toutes les femmes, dont la mission est d'intervenir comme apôtres de la paix quand l'anarchie et la discorde troublent le repos des peuples.

Au nom de l'humanité, que Dieu veut unie en lui par un bien d'amour.

Au nom de la religion, qui par le Christ nous prêche la miséricorde et la gratitude nous venons vous remercier de vous être énergiquement prononcés contre le maintien d'une loi qui, n'était plus dans nos moeurs ne devrait plus être dans nos codes. Honneur à vous, généreux soutiens de la vérité qui défendez l'inviolabilité de la vie, que Dieu seul a donnée, que Dieu seul peut reprendre! Votre minorité c'est la force car votre minorité c'est le progrès, ce sillon de la perfectibilité qui, de siècle en siècle, guide l'humanité dans la voie qu'elle doit suivre pour obéir à la destinée, dont le bonheur est le but ! Poètes, orateurs et légistes unis dans une même pensée pour le maintien de la justice que les bénédictions divines soient sur vous et vos familles. L'histoire transmettra vos noms à la postérité et quand la loi de sang que vous avez combattue sera abrogée, l'hosana des justes glorifira votre mémoire!

Pour nous, filles, soeurs, épouses, mères, de citoyens pacifiques de la grande ville industrielle qui s'est montrée calme dans la force, patiente dans l'adversité, nous appelons sur vos généreux efforts la reconnaissance nationale. Lyon a du à la sagesse éclairée de quelques hommes le repos dont il jouit au sein de tourmente des parties que les défenseurs des lois de violence prennent exemple de modération sur ces hommes. La France doit étouffer les mauvaises passions et tuer les lois qui tuent. Plus de bourreau, plus de victimes, calmons les parties et que

la justice humaine puisse dire à Dieu s'il lui demande compte de ses enfants "les voici Seigneur, il n'en manque pas un seul"

Lyon le 24 9bre 1848

Les femmes lyonnaises

Aline Juif vice présidente de com-ion du travail pour les femmes
Elisa Mornet présidente de la com-ion du travail pour les femmes
E. Deroux
Eug. Niboyet femme de lettres
Octavie Sisley
Veuve Measky
Elisa Lemonnier
Louise Bricot
etc.